

荒木山通信

2023年8月

第18号

北房文化遺産
保存会

〔ご挨拶〕

北房文化遺産保存会の活動について

北房文化遺産保存会 会長 畦田 正博



令和五年も早三分の二が過ぎようとしています。

二月から三月に掛けての荒木山西塚古墳発掘調査、四月末の荒木山通信発行、七月と八月の西の明日香村ガイド養成講座と計画していた事業も、役員・会員を始めとして多くの方々のご協力やご支援を頂いて着々と進んで来しました。まづもってお礼申し上げます。

一月末の総会の役員改選で、久松秀雄氏の後を受け、会長の大役を仰せつかりました。深い識見と熱い思いで会を導いて来られた氏には到底及びませんが、奥田副会長を始めとする役員・会員の皆様と手を携え、会の目的である「文化遺産を活かしての地域振興」を目

指し頑張つて行きたいと思っています。

真庭市北房地域には、盆地を囲む山裾に二四〇個所を超す古墳があります。三世紀半ばの古墳時代前期から七世紀末の終末期まで首長墳が連綿と続きます。これは、他地域ではあまり見られません。また、数多くの歴史的建造物などもあります。この北房の歴史的遺産を保全・活用した町づくりを目指した「西の明日香村構想」が北房町時代に策定されました。中でも古墳時代末期の定古墳群・大谷一号墳は国の指定史跡となり、脚光を浴びました。しかし、北房地域のみならず真庭市内でも最も古いとされる荒木山の古墳は市の指定

史跡とはなっていました。あまり知られておらず草木が生い茂った状態でした。「これではいけない。何とかしたい」と久松秀雄氏が「荒木山の古墳を顕彰する会」を立ち上げられたのが平成二八年二月のことでした。

以来七年、会では古墳の清掃や整備、顕彰活動・会員研修、機関紙の発行等の活動を行ってまいりました。その間、市に古墳の調査を要望し、会員が古墳の非破壊調査などにも参加してきました。西の明日香村道しるべ事業として市（北房振興局）とタイアップして案内看板の設置なども行いました。そして、活動を荒木山の古墳から北房地域に広げ、文化遺産の保存・活用・研究を通じて地域の振興に寄与し、次世代に継承しようとする会の名称も令和四年度から「北房文化遺産保存会」と改めました。久松氏が築かれた礎のもと、この活動を更に推し進めていきたいと考えています。

この秋、十一月からは令和五年度の発掘調査も始ま

ります。皆様方のご支援やご協力をいただきながら取

道しるべ整備事業についての発表

七月八日（土）、広島YMCA国際文化ホール（広島市中区）で中国地方地域づくり等助成事業報告会があり、私（畦田）と事務局の平城元氏の二人が参加しました。道しるべ整備事業での案内看板作成の助成をして頂いた中国建設弘済会の主催で、その助成を受けた三一体のうち選ばれた九団体が報告しました。

当会では、看板設置や助成申請事務に中心となっており組んだ平城氏が発表しました。コンパクトにまとめられた分かりやすいプレゼンでした。各団体一〇分ずつの発表と報告会選考委員のコメント。発表後、参加者と選考委員による投票で一位から三位までの優秀賞が選ばれました。

そして、「過疎は終わった！？」中国山地から始まる新時代」と題した、みんなで作る中国山地百年会議事務局長 森田一平氏

り組んでいきたいと思います。宜しくお願い致します。



【事業報告】② 西の明日香村・道しるべ整備事業

の地域づくり講演会の後、表彰式と講評がありました。講評では、「地域素材をどう活かしているか。持続性」といった観点で評価した」と述べられました。開票の結果、本会の発表は委員の評価は高かったものの惜しくも五位。何れの発表もその地域の素材を活かし、地域の活性化に前向きに取り組もうとしたものでした。

（畦田 正博）

定北古墳三号陶棺刻字（その2）

三年ほど前の本紙第8号で、定北古墳の三号陶棺に刻まれた「記」という漢字についてあれこれ述べました。そして、最後に「それにしても陶棺に文字を刻むのであれば、なぜ被葬者名かそれに関係する文字を刻まなかったのかと、その人物に文句を言いたいのは私だけではないだろう」と締めくくりました。



【三号陶棺（ふるさとセンター1階ロビーに展示）】

先日、刀剣銘文について、少し調べていたとき、埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文に関して、宮崎市定氏が興味深い説を発

表していたことを知りました。

宮崎市定氏は、平成七年に亡くなられましたが、文化功労者表彰を受けた、日本における東洋史研究の牽引者でした。特に中国に関する研究は漢代から清代に至るまでの幅広い時代に及んでいます。いわば漢字・漢文の泰斗です。

※泰斗…その道の大家。大学者

稲荷山古墳は、五世紀後半の築造とされる前方後円墳で、一九六八年に後円部の礫（れき）から金錯（きんさく）銘鉄剣（めいてつけん）、いわゆる稲荷山鉄剣が出土しました。十年後の一九七八年、鉄剣の保存処理中、実に一一五文字もの金象嵌（きんざうがん）の銘文が発見されました。



※礫…木棺の周囲を礫で包んだ埋葬施設

※金錯…金象嵌（彫刻した溝に純金を埋め込む技法）

この銘文の解説作業の結果、獲加多支鹵大王（ワカタケル大王）という文字が確認され、雄略天皇と比定されました。

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埵其兒多加利足尼其兒名（中略）其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

辛亥の年七月中、記す。ワワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の兒、（名は）タカリのスクネ。其の兒、名は（中略）其の兒、名はカサヒヨ。其の兒、名はワワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケルの大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

これに対して、宮崎氏は、何か所か、異なる読み方が可能ではないかと述べているのですが、ここでは「記」

についてのみ取り上げます。冒頭の「辛亥年七月中記乎獲居臣」は、「辛亥年七月中記」で切るのはなく、「辛亥年七月中」で切りま

す。そして、「記」を氏族名と考え、「辛亥の年七月中、キノワワケの臣」と読みます。その理由を二つ挙げて

「まず、ここを「記す」とすると、文末の「吾が奉事の根原を記す也。」と「記す」が重複する。この文章が純粹の漢文の語法で書かれたものであれば、同一文字の重複は、極めて拙いことになる。漢文なら一字もむだな文字はない。

二つ目は、この銘文は『史書』の列伝の体にしたがつて書かれていると思われる。この場合、最初に本人の姓と名を示すはずである。この姓は最初に一度出るだけで、その後は再び現れることがない。漢文では無用の重複を嫌い、文章を一字でも短く書こうとするものである」と説明します。

さらに、「記と紀は同意同義で相つうじて用いられる。当時、音声だけで伝わったことを考えれば、何の漢字

を宛てるということも定まっていなかったであろう。紀氏の氏族名を記の字で表すことも有りうること」と述べています。

ただし、問題は氏族名がはたして辛亥年（定説では四七一年）頃に一般化していたか否かですが、これについては、『日本書紀』の雄略朝には紀ノ小弓宿禰、紀ノ大磐宿禰父子のことが記されている」としています。

「記」は氏族名ではないか、この説に大変驚きました。前回、「なぜ被葬者名かそれに関係する文字を刻まなかったのか」と文句を言ったのは、実は一九九五年に発行された定北古墳発掘調査報告書の陶棺刻字「記」についての考察部分を読んでいたからです。それには、次のように書かれていました。

「・・・（記」という文字は）被葬者名を略記している場合、あるいは陶棺作成者の略記名などが想定される。「記」はキノ乙類仮名表記文字であり、その点では「木」ともあるいは「紀」とも同じであるから、「記」

でもつて「紀」を表現したとすることはできないことはなく、そうとすれば人名との関係も浮上してきて、従来言われてきたような吉備と紀氏の関係をうかがわせる興味深い資料になるが、「紀」氏を「記」氏と書く例は今日知られる史料には一例もなく、「記」人名説は成立の見込みはまずないと考えるべきであろう。それならば「記」にはどのような意味が考えられるだろうか。・・・3号陶棺は、作成時において、墓室における前後が想定されていたのではなからうか。「記」が記号的な文字として使用されたとする推論が成立するとして、ある方向性をもつて文字を書き付ける理由は、陶棺の方向が意識されていたとする以外に説明がつきにくいように思われるのである。」

これを読み、墓室に陶棺を入れる際に方向を間違わないように一種の「しるし」として「記」を刻んだとする考えには、どうにも納得がいかなかったものの、そうか、「記」の人名説は見込みがないのか。「従来言

われてきたような吉備と紀氏の関係」があるなら、なおさらのこと残念だという思いになり、あのような文句を書いたのです。ところが、偶然にも宮崎氏の稲荷山鉄剣銘文に関する説を知ることとなり、そこに「記」を「紀氏」と読むことができるのではないか、という説が展開されていたのです。から驚いたのは当然です。

宮崎氏の説が発表されて今年でちょうど四十年になりますが、現在の読み方は、日本古代史・日本史の学者らが当初読んだままのものが定説になつていっているようです。しかし、この読み方は、

「どこか不自然で腑に落ちない感じがして宮崎氏の読み方の方がひねったところがなく、蓋然性が高い」と考える人もいます。

宮崎氏がこの説を発表した際の言葉を繋ぐと、概ね次のように述べています。

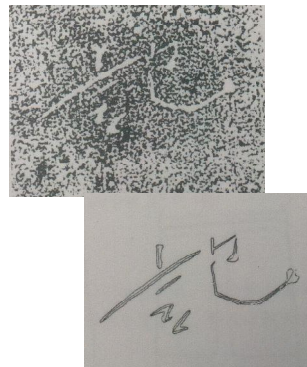
「日本ではとかく、研究の態度方法にまず差等をもうけて優劣を定め、それをそのまま結論の判定にちこもうとする傾向が強い。古代は史料が希少であるか

ら、あらゆる可能性を考えておくことは将来どんな大発見に繋がるきっかけにならぬとも限らない。現今の段階では、すべてが仮説ではつきり定まったものは何一つとしてないからだ。「何月中」で切れて、記という字のない例の方がはるかに多いのだ。学問はただ純学問的のみ、その成果の当否を問うべきである。派閥の合意が研究の出発点となれば、それは学問の自由を自ら放棄することを意味する云々」と。一部、厳しい表現もありますが、全体としては、学問に対して真摯に取り組む姿勢を感じとれる言説だと思えます。

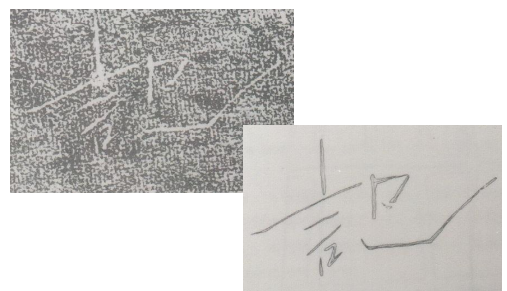
さて、私は以上をもつて定北古墳の当該陶棺の被葬者は紀氏だったなどと主張するつもりはもちろんありません。ただ、定北古墳の陶棺文字の人名説を「成立の見込みはまずない」と断定したくはありません。どんな考えであつても、客観的根拠がないのであれば、仮にそれが定説であつたとしても推論に過ぎません。「あらゆる可能性を考え」て、それらを列記しておき、後

の研究成果を待つという姿勢がとても大切なことではないかと考えるのです。

(平城 元)



【陶棺の身に刻まれた「記」の文字】



【陶棺の蓋に刻まれた「記」の文字】

「英賀廃寺の建立とその背景」

五三八年の仏教伝来から六四五年の大化の改新までの約一〇〇年間に創建された寺院は、四十六箇寺に過ぎない。多くが王家と崇仏派氏族の創建で畿内にある。その中に、吉備南部に大化の改新以前の寺院址が四箇寺ある。岡山市の賞田廃寺(上道氏)・大崎廃寺(不明)、総社市の秦原廃寺(秦氏)、倉敷市真備町の箭田廃寺(下道氏一族の吉備氏)の各氏寺である。

その後、大化の改新から七一〇年平城京遷都までに

創建された寺院は約五〇〇箇寺に上るが、その約七割強が六七二年の壬申の乱以降とされる。天武天皇政權が、教理を持つ仏教の「仁王般若波羅密經」など護国經典を讀経させ、「鎮護國家」を目的に國家宗教として中央集權國家の機構に組み入れたためである。詔では、寺院建立の推進と僧尼認可の見返りとして、諸寺へ食封を与え僧尼は課税免除とした。これにより寺院建立は地方へと加速した。また、運搬脚夫・役民の往還や窮民救済施設として、主要道路の交通行政機能を担う。大化の改新から平城京遷

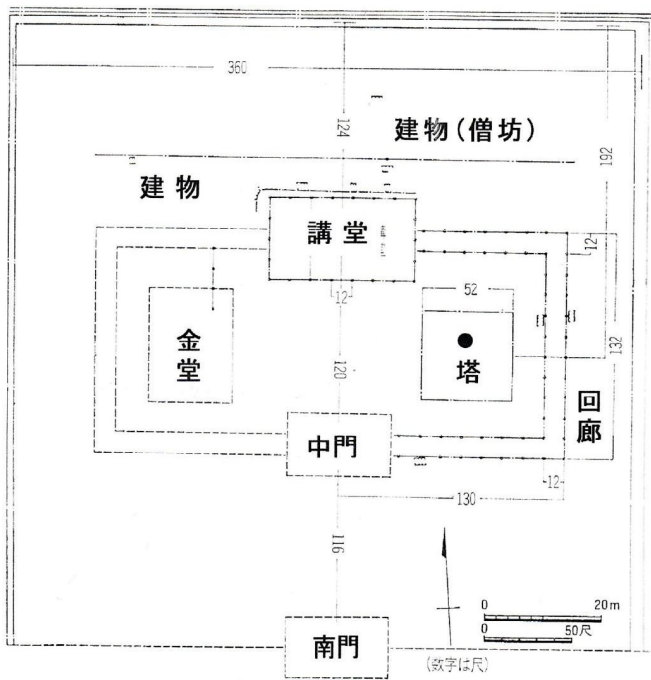
都までの創建とされる岡山県内の寺院は、三十一箇寺ある。美作国は播磨の渡来系氏族の影響を受けた寺院が多くあり、美作道（姫路から津山）の要所と出雲・因幡・伯耆への街道沿いにある。備前国と備中国の寺院は古代山陽道沿いにあり、中央政権と繋がり濃い氏が多い。英賀廃寺だけが備中国北部にあり首長級の氏寺とされている。しかし、官寺の可能性も否めない。英賀廃寺の伽藍配置は東に塔・西に金堂、これらを



【英賀廃寺軒丸瓦】

中式瓦を使用している。また塔は、基壇の大きさを当時は珍しい五重塔と推定さ

北に講堂・南に中門を中軸上に回廊で繋ぐ。講堂北側に僧坊と、これらの伽藍を南門からの塀がほぼ一町（約一〇八m）四方で囲む。軒丸瓦には備中国独自の備



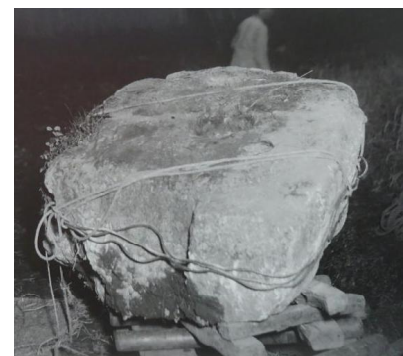
【英賀廃寺伽藍推定図】（北房町史の図を一部改変）

れている。伽藍配置型式は現在、金堂が南北に長く、入口が東面する「観世音寺式」とされる説が有力である。観世音寺式伽藍は現在全国で十五箇寺あり、大宰・総領が管轄した地域（筑紫・周防・伊予・吉備・坂東）に見られる。大宰府観世音寺や多賀城廃寺などのように、重要拠点の官衙・城柵に附属が隣接・近隣にある官寺特有の型式で「行政・軍事」機関と「鎮護国家」機関のセットである。吉備の英賀廃寺も郡衙といわれる遺構の近隣である。備後国北部三次市の寺町廃寺も、英賀廃寺と同じ条件下にある。さらに、五重塔を持つ一町四方の英賀廃寺の建設には莫大な費用と造寺集団が必要で、英賀の首長単独で建立できただろうか。同規模の寺院建立の総費用は、現在の価格で約一〇〇億円とも言われている。創建が六七五年前後とされておき、石川王が吉備を統轄する吉備大宰として赴任していた時期と重なる。新



【英賀廃寺の看板】

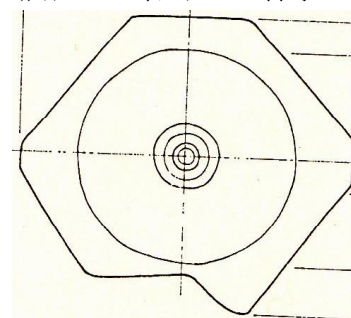
※ぶどう畑の奥に塔の址に建てられている「大雄山円福寺」の石碑が見える。



【塔の基壇礎石】

（昭和14年写）現在は京都に

（長径1.85m、短径1.5m、厚さ1m）



【礎石略測図】

なお、伽藍全ての完成まで推定約三〇年かかっており、石川王はそれを待たず六七九年に亡くなったが、その時、最初に建てられる五重塔は完成していただろうか。

（三輪 能章）

会員募集中

私たちと一緒に北房の文化遺産を守り、その素晴らしさを知らせ次世代に伝えていきませんか！

古代の夢を語ろう。古墳に関心のある人、皆来たれ！

特別寄稿

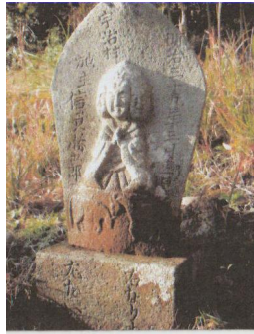
「備中と道」の紹介（その5）

備中と道推進協議会 顧問 森山上志

後谷集落を過ぎ、前方に宇治の町が見えかけると、右手に牛馬供養碑がある。

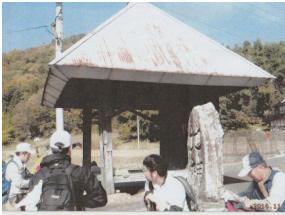
きれいな仏像が彫刻してあり、その下に牛と馬の姿が浮き彫りされている。次の刻字もある。

・右 なりわ
・左 た□（地元の名前）
明治三十九年建立
（一九〇六年）



ぶどう畑の脇に屋根をトタン巻きした辻堂がある。直近には地神も祀られている。急坂を

越えて来た通行人はほととしてひと休みしたことである

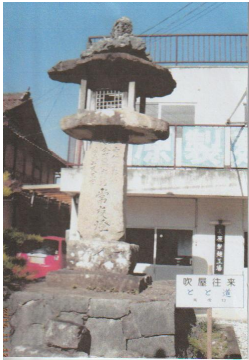


元仲田邸

宇治の町に入り、ひとときわ目に着くのが「元仲田邸」である。江戸期の庄屋の屋敷であるが、今は酒蔵を改修して宿泊研修施設「備中宇治彩」の山里として活用されている。



製麺工場の前に立派な常夜燈がある。その柱に吉備津大明神、金比羅大権現、若松天王宮が刻まれている。（寄進 仲田氏）



ここまで来れば吹屋は近い。しかし、魚仲仕にとつ

ては急坂を上って延命寺の脇を通って、吹屋の街中までの山道（約5km）を重い魚籠を担いで運ばなければならない。

③ 宇治ー吹屋に至る

と道

と道は「しらげが城址」の麓の道を北へ進む。道の右手に「石田五輪塔」（市指定重要文化財）がある。その説明板には「白色五輪塔で鎌倉時代以降、当地に勢力を誇った赤木一族の墓塔群と考えられる。その一基に北朝年号の応安四年の銘が刻まれている。（二二七一年）

宇治町内には千基もの白色五輪塔が遺されており、



今後の研究が期待されている。



【石田五輪塔】

（高さ一七〇〜一八〇cm）

と道はこの五輪塔から「笹尾城址」の脇（東）を通って延命寺まで尾根道を登るのである。（およそ三

km）

* 笹尾城址については、

宇治地区まちづくり推進協議会が説明板を建てている。

その尾根道は標高五一九mの高地を縦断する所もある。

その急坂に沿って小さな石仏、牛馬供養碑等が祀られている。さらに無数の五輪塔が据えられている所もあり、さながら仏教の修行の地を登っているような感覚を覚える。

天秤棒で重い魚籠を担いでいた魚仲仕たちは、どのような思いで登っていたのだろうか。



【無数の白色五輪塔群】

延命寺と道標

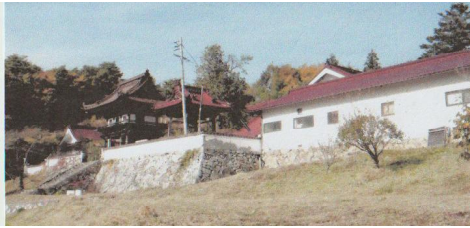
精進料理で有名な延命寺に到着。曹洞宗の寺院で永

正二年（一五〇五）の開基と伝えられている。当初は密院であったが廃絶し、福知山城主・朽木八郎岩国公によって再建された。

元禄年間に荒廃した銅山を再興した大阪の豪商「泉屋」（後の住友）が梵鐘を寄進している。

境内には「享保十五年戊（一七三〇）七月 念仏講中 下谷白石大深」と銘のある手水石が遺されている。大深は現在では廃れているが、「大深千軒」と云われ吹屋銅山の発祥の地とされている。

【延命寺】



延命寺の参道入り口に道標があり、刻字は次の通りである。

- ・当国巡礼第十番 延命寺
- ・従是成羽江 三里半

新見江 四里半

・明治二十三年三月建立

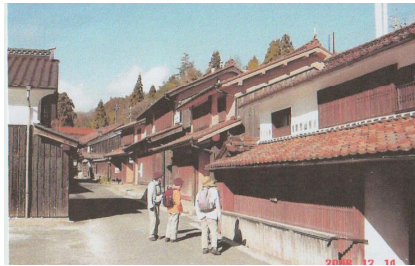
（一八九〇年）

とと道は、この道標を過ぎて「大塚屋敷跡」の標柱の前を吹屋の町並みへ向かう。

吹屋の町並み

吹屋は「吹屋ふるさと村 重要伝統的建造物群保存地区」に早くから指定されていたが、令和三年には『日本遺産』に指定された。

【吹屋の町並み】



吹屋は江戸期から明治にかけて日本有数の銅山の町として栄え、さらに江戸末期からはベンガラ（国内唯一の生産地としてより一層繁栄した。往時は銅、鉄、薪炭、雑穀を集散する問屋やベンガラを生産・販売する



【ベンガラを扱った商家】

商家が軒を連ねていた。

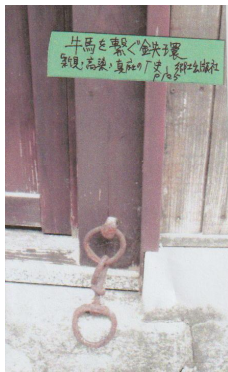
その上東城往来や吹屋往来から牛馬により集散された物資の集散地としても重要拠点でもあった。

・東城往来↓東城の鉄や薪炭

・吹屋往来↓高瀬舟で成羽

湊へ運ばれた物資

吹屋の町中へ左の写真のような往時を物語る証拠物もある。



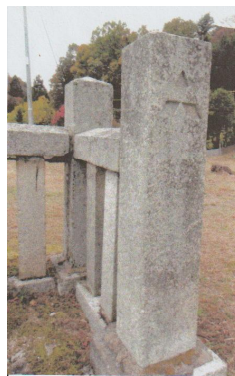
【牛馬をつないだ鉄環】※

吹屋の町中に牛馬の糞尿

の臭いが満ちあれて困ったという伝承も遺されている。※『新見・高梁・真庭の歴史』（郷土出版社）に掲載されている。

山神社（本山神社）

現在、資料館になっている旧吹屋町役場の近くに銅山祭神の本山神社がある。明治六年（一八七三）に銅山の経営を引き継いだ三菱の社紋が、鳥居の額や玉垣にも刻まれている。これこそ吹屋銅山の歴史を今に伝える貴重な史跡である。



【玉垣に彫刻された社紋】

運ばれてきた鮮魚の行き先

自動車が無い時代に西浜（現笠岡市金浦町）から僅か十二時間の超特急便で吹屋に搬送された鮮魚は、何処に納められていたのか。

このことについて「吹屋ふるさと村」の村長さん、「フオレストフォーピープ

ル岡山」の理事さんから談話をいただいた。お二人の要旨は次の通りである。

○吹屋の魚問屋（確実に存在していた）を経て、

数軒（三軒は確認）あつ

た旅館で、当時最も羽振

りの良かったベンガラ関

係の旦那衆を通して特定

消費者に渡っていた。

○高価な鮮魚であり、し

かも少量なので銅山労働

者の口には入らなかった

と思える。

明治の終わり頃、成羽や高梁の町中で、「生の魚が食いたけりや吹屋へ行けえ」と云われていた事がウソでは無かったと私も思う次第である。

*「とと道」に関するお知らせ

本稿で取り上げた宇治―吹屋の「とと道」は、今後は通行不可となり、迂回路（平成のとと道）を通る事になる。理由は次の通りである。

- ・貴重な史跡が存在する。
- ・案内人無しでは危険。
- ・環境保護が必要な古道。

頭椎大刀の姿 ― 土井二号墳 ―

― 古代の剣 その2 ―

戸村 彰孝

令和五年四月二十四日

曇り

神道山の古代吉備文化財センターを訪ねる。二年前、谷尻遺跡の縄文・弥生土器を手にとつて拝見して以来だ。パスの終点から新緑の山道を十五分歩いて到着。目指すは、中津井の土井二号墳から出土した頭椎大刀の実物と対面することであつた。(レプリカは北房ふるさとセンターにある。)

大谷古墳出土の双龍環頭大刀に比べると知名度は低いが、日本の古代国家が成立する前夜の地方豪族の動きを反映している点で、土井二号墳の頭椎大刀の存在は歴史的価値が高いと考えたからである。



A【頭椎大刀（土井二号墳出土）】

発掘当時の様子は一九七九年三月に県教委が上梓した「岡山県文化財発掘調査報告書(26)土井2号古墳」に詳しい。要約すると、

(一) 頭椎大刀の形状と馬具柄頭は半分欠損、畦目あり、懸通孔と鷗目金具が残る。柄間に打込みの波状文で囲んだ蕨手文が施され、中心に目釘穴あり。鞘金具は五種類残る。刀身は腐食化著しく原型とどめず先端部一部残り平

造。馬具あり。

(二) 大刀を持つ被葬者と大

刀の分布
頭椎大刀は全国で百ヶ所出土。東日本に八〇%集中。東国は五世紀以降、名代多し。中央皇族・豪族の舎人の供給源。舎人には東国以外の地方豪族の子弟も存在。土井二号墳の主もその可能性あり。

上記(一)の刀状から写真Aのように復元した日本の工芸技術には目を見張る。素晴らしい。



B【刀に手をつがえる武人】
(上芝古墳出土)

(二)の頭椎大刀の分布については、岡山大学名誉教授の新納泉氏の「装飾付大刀の分布の歴史的背景」という論考が注目される。

分布と地域差の項で図1を示し、双竜環頭大刀は備前北部から出雲に通じる後の出雲街道沿いに主として分布。単竜・単鳳環頭大刀は瀬戸内海沿岸に集中。頭椎大刀は数そのものが少な

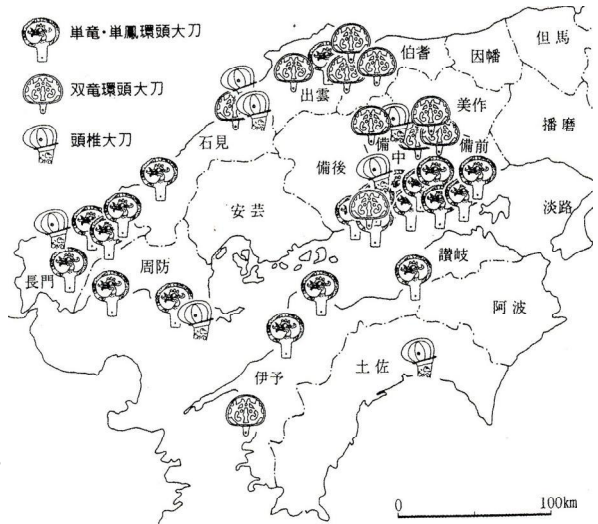


図1【中国四国地方における三種の大刀の分布】

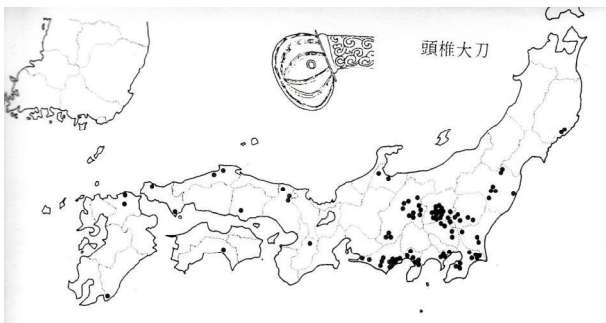


図2【頭椎大刀の分布】

クが拮抗する状況にあつたと分析している。

ここで取り上げた写真Bは、多くの舍人供給地域とされる東国、群馬県高崎市の「かみつつけの里博物館」が収蔵している武人のハニワである。甲冑に身を固め

大刀に手をかけた武人の姿から私は土井二号墳の主の姿を連想するのである。

土井二号墳は六世紀ごろのものとして推定される。六世紀の吉備のクニは五世紀の栄光を失ってヤマト王権に

じわじわと侵略された。白猪の屯倉の設置がその証であらう。英賀の中津井の豪

族が中央に直結しても不思議ではなからう。それに、この地域は弥生・古墳時代の

の初期から谷尻遺跡の出土品にミヤコの土器類が多く認められるなど特異な伝統の持主なのである。

ここで再び頭椎大刀の源流について少し述べることを許していただきたい。古代の装飾大刀の多くは韓半島に源をもつといわれるが、頭椎大刀の祖型はヤマト古代にあるという。過年催された宮崎県博物館の「六世紀代の日韓金銅製品―覇者の愛した煌めき展―で韓国の考古学者の朴敬道氏は、

「頭椎大刀の祖型は半島には認められない。倭国独自の系譜であらう。」と指摘している。

七十二年の撰上と伝えられる古事記の天孫降臨の条に『天忍日命、天津久米命が鞆を負い、頭椎大刀を佩きニギノ命の警護にあたった。』とある。荒唐無稽の神話ではなく、歴史上の事実を反映した文と私はみたい。

荒木山西塚古墳 発掘調査

参加者から

古墳発掘に
参加させてもらって

岡山市

斎藤 真理

私は、今回発掘調査に参加させて頂き嬉しく思っています。

一つは、小学生だった頃からの念願の発掘調査が出来たことです。私の小学生時代の頃は、当時エジプトピラミッドのTV番組がよく放送されていて、毎回ワクワクしながら見ていました。その流れから、日本でも遺跡調査のニュースが流れると現場で発掘作業をし

てみたいという思いがずっとありました。それから月日が流れ、今回荒木山西塚の一般人も作業に参加できる調査記事が新聞に載ったのを見て、心弾み思わず申し込みました。

当日は、その場での出土品は無かったのですが、トレンチ作業やふるい掛け作業は「何が出てくるかな?」と期待し、雨が降ってきたり、寒かったりしても、あつという間に時間が過ぎ楽しかったです。

もう一つは、保存会の方の丁寧で親切な案内は、初めてする体験の緊張をほぐしてくれて、作業班と一緒にになった人たちとの交流も和気あいあいとでき、次回もまた参加したいと思わせてくれました。新しい体験と楽しい出会いをありがとうございました。



ガイド養成講座の開催



本年度の活動計画の一つ、西の明日香村ガイド養成講座を七・八月と二回に分けて開催しました。

講師は、テキストを中心となつて作成した当会の平城元氏。プレゼンで、図や写真を提示しながら北房の文化遺産（古墳を中心に）について説明しました。

参加者のアンケートから

- ・プレゼンでの説明、写真や図が多く、またカラーで分かりやすかった。
- ・知識の少ない私には少し難しかった。テキストを読んで勉強したい。
- ・古墳などの知識がなくて楽しく聞けた。
- ・北房には大きな古墳がいっぱいあるのでですね、

いよいよ始まる!

平成五年度の西塚古墳 発掘に向けて

この秋、一・一月末から発掘調査（二年次）が始まります。（非破壊の地中探査は一〇月に）それに向けての官（北房振興局・市教委）学（同志社大学）民（北房文化遺産保存会）の三者によるコンソーシアム連絡会が七月一四日（金）に持たれました。実施内容や調査日程等について話し合いました。



以後、更に細かく詰めていくために何回か連絡会を持つ予定です。
皆様方のご理解・ご支援をよろしく願います。